

～ 言葉少なく、見守る ～

何をするかの説明はせずに、絵の具、筆、紙を置きました。子ども達は自然に絵の具に手を伸ばし、描き、色を混ぜ始めます。手を浸す、こぼす、混ぜる、などをしながら集中していきます。途中で澱粉のりを出すと、手に塗り、何かを感じているようです。

興味を持ち、集中するポイントは1人1人違います。紙の上や、手に塗った絵の具をじっと見つめる、紙に絵の具を流す、容器から容器に移し替える、黄色だけを使う、のりを混ぜる、溶かす等、真剣な表情です。

色を足すと変化する事に気付き、画用紙がボロボロになってくる事に気付き、水を足すと、のりの感触が違うことに気付きます。大人が誘導しなくても、自分で発見し、探求していきます。

「やっていいの?」「見て!」の声も無く、走り回る事もなく、取り合いにもなりません。1人1人が違う事をやりどの子も自分の手元に集中し、没頭して遊んでいました。子ども自身が、自分で考える時間が多かった、ように感じます。

大人の声を最小限にし、盛り上げたり教えてりしないからこそ子ども達は、「自分の世界」に入っていたのだらうと思います。その「自分の世界」こそ、その子の感性の世界です。

時には、子ども達の行動を、止めない環境を作り、要求にこたえていくだけで、いいのかもしれない。その子が感じている世界を、想像して見守ることが、その子の感性を受け止め、育てていく事につながるはずです。

